

第 24 回 体育授業研究会東京冬大会 Winter Webinar 報告

体育授業研究会
研究委員長 鈴木 聡

■はじめに

令和 2 年 12 月 26 日（土）に第 24 回体育授業研究会東京冬大会 Winter Webinar を開催しました。本来、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会が夏に開催される予定でしたので、当初より夏の研究大会は開催しないことになっていましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、今後の研究大会実施を含めて計画変更しました。その一環として、オンラインによる Webinar を令和 2 年 8 月及び 10 月に実施し、現在の研究テーマである「体育の認識学習を考える」を追究することとしました。また、例年開催している冬の研修会を「第 24 回体育授業研究会東京冬大会（以下、東京冬大会と称します）」として位置付けてオンラインで実施する運びとなりました。

東京冬大会では「体育科における認識とは何か」をサブテーマに据え、認識学習について学びを深めることにしました。今回は、石田聡宏先生（埼玉県伊奈町立小針北小学校）の実践提案をベースにシンポジウムを実施しました。シンポジウムでは、三本雄樹先生（新潟市立小針小学校：第 1 回 Webinar 実践提案者）進行のもと、指定討論者として久我隆一先生（調布市立八雲台小学校：第 1 回 Webinar 実践提案者）、小畑治先生（福井県若狭町立みそみ小学校：第 2 回 Webinar 実践提案者）、佐藤哲也先生（武蔵野市立大野田小学校）に登壇いただき、「私が考える体育科の認識学習」について議論を深めました。

後半は、荻原朋子先生（順天堂大学）の進行のもとで、ブレイクアウトセッション及び全体での共有を行いました。今回のブレイクアウトセッションは、2 回に分けて実施しました。前半は、参加された方の属性（職種、学生、経験年数等）から 8 グループに分かれて石田実践及びシンポジウムの内容について議論しました。後半は、「現在関心あるテーマ」を参加者が選び、7 グループに分かれて意見交換を行いました。設定したテーマは、「身体的認識」「認識学習の評価」「石田実践をさらに深める」「体育科の本質論」「自分が考える認識学習」「ポイント、コツ、カンに関すること」「幅広い情報交換」でした。約 100 名の参加者が活発に意見交換を行い、盛会となりました。以下、内容について報告します。

■Winter Webinar 内容から

1. 趣旨説明と認識学習の概念整理 ② （体育授業研究会 研究委員長 鈴木 聡）

初めに鈴木から、趣旨説明及び認識学習に関する概念整理を行いました。概念整理は、10 月実施の Webinar に引き続いて 2 回目です。今回の趣旨は、今までの議論を継続しながら「体育学習における認識の中身は何であるのか」について、授業実践を通して深めて

いくこととしました。過去2回では、運動学習は「わかってできること」、「できるためにわかること」が大事であることを確認しました。科学的、普遍的な運動技術の情報だけでは、体を動せられるようにはなりません。運動技術を自身の身体に取り入れようとするときには自己内対話が起きます。動いてみて感じる場合があります。それを、ともに運動する仲間や教師と共有したり、コツを見つけ合ったりすることで、運動感覚を身に付け、運動ができるようになっていきます。その際の学習プロセスや教師の手立てが、三本実践、久我実践、小畑実践から示されてきました。3つの提案に共通していたのは、児童生徒が運動するときにはどのような自己内感をもつのか、ということに着目していたことです。つまり、いずれも身体的な認識を学びの対象にしていました。体育科の認識学習にはいろいろな視点がありますが、体育授業研究会では「身体的認識」に焦点化し、研究を進めてみたいと思います。現時点では以下のようにその概念を整理します。

- ・「自分の身体や感覚」と「普遍的な技術」を往還させ、自分の中で対話し仲間とともに対話しながら「わかってできる」ことに向かって学ぶことを身体的認識学習と捉える。
- ・身体的認識学習をしていくには、教師は児童生徒が「どんな感じでその運動をしているのだろうか（動感）」ということ意識することが大事であり、そのために教師の運動技術認識が重要になる。
- ・児童生徒どうしの動感の交換や教師の見取りの内容、そして各運動領域との関係について、今後研究していきたい。

2. シンポジウム「私が考える体育科の認識学習」

①実践提案 私が考える認識学習～「創作オノマトペ」で運動感覚を言語化する～

伊奈町立小針北小学校 石田聡宏

はじめに石田先生より実践提案をしていただきました。石田先生は、今までの議論を受けて「どんなイメージで動けばいいか」「自分で動いてみてどうだったか」「どこを意識して動いてみればいいか」ということを言語化したものを「身体知」と捉え、認識の対象としました。さらに、諏訪（2016）による「身体と頭（ことば）を駆使して体得する身体に根ざした知」という説明を紹介し、身体運動そのものや運動するときの知覚を言葉にすることで得られる知が「身体知」としてしました。自分の動きをどうにかして「言語化」する営みが「身体知」を学ぶことであり、そこから子どもたちは運動のコツを体得していくという主張です。運動の「ポイント」は客観的に観察可能であり、運動の「コツ」は、主観的で観察は難しいとされていますが、石田先生は、「コツはひとり一人が自分の身体と向き合うことでつかんでいくものであり、コツがわかればできることに直結する」という視点を示しました。

また、体感と言葉のマッピング、つまり動きの感じを言語化することの意義は、「体感の微妙な差に気づけ、安定した動きにつながったり運動を修正したりすることが可能になること（諏訪、2016）」や、「第三者に伝えることを通して仲間と運動を共有したり共感す

ることが可能となること（鶴原、2012）」だと主張しました。さらに、日本体育協会（2008）が示した言語化の例として、「むちを振るような感じ」という比喩的表現、「ポンと」というような擬態語、「タ、タ、ターン」のようなリズムを作る言葉の3つを紹介し、さらに運動を言語化する際の手立てとして、清水（2013）の口伴奏についても言及しました。口伴奏は、だるま回りをしている横で、「伸ばして一曲げてー、伸ばして一曲げてー」と言ってあげるものです。口伴奏の効果は、共有化した運動のポイントやリズムを意識して運動できることや、仲間の運動をよく観察したりアドバイスしたりしやすくなることが示されました。一方で、動きの感覚が、それぞれがもつ固有性と合わない場合があることにも触れました。

以上のことから石田先生は、「創作オノマトペ」を構想しました。創作オノマトペとは、音素を自由に組み合わせて並べたもので、運動した感じを言葉にしていく活動です。実践事例は、6年生の側方倒立回転です。ワークシートには、側方倒立回転の分解図とともに、あらかじめ「勢いよく振り上げる」「しっかり蹴る」「手にのる」「アゴを出す」「押し放す」「腰を曲げる」「片足」「両足」という動きのポイントが、情報として示されています。この一連の動きをオノマトペで表現する活動を通して、子どもたちが主観的に動きの感じを言葉にしながらかツツを見つけようとするのをねらいました。子どもたちの学びの姿は、映像及びワークシートに表出されたオノマトペとそれを説明する言葉によって示されました。

「ペン」と片足をついて、「タタ」と手をついて回転した後、「ドト」と足をついていき、「ピン」と起き上がる、という一連の動きを表現した児童は、もともと示されていたポイントに加えて、「片手ずつつくこと」と「片足ずつつくこと」そして「最後にきれいに見えるようにするといい」という新たな情報を書いていました。「ス、サ、バンバン、サ、トン」と表した児童は、足を伸ばした後、バラバラに「サ」、「トン」と軽く着地していくと自身の感覚を記しています。「ドン、フワッ、ペンペン」と書いた児童は、「フワッ」というところは足で風を切る感じ」と勢いをつけて着地に向かう感じを表現していました。「ペコン、ペタン、ピッタンコ」と表現した児童は、「ペタンのときに足が曲がってしまう」と自身の課題を認識して書いていました。それに対して、石田先生が「力を入れる場所はどこかな？」と問うと、「膝かな」と答えていたそうです。「タタタタと走り、ペタンと手をつき、クルッと回ってピンと立つ」と、オノマトペと実際の動きを結び付けて表現した児童もいました。

3回目の授業では、ペアでシンクロすることに取り組みましたが、「せーので同時に出る」など、それぞれの動きというよりは一緒に出るための方法に児童の意識が集中しました。石田先生は、より「身体の動きや動きの感じ」に意識を向かせて子どもたちを交流させたいと考え、4回目の授業では着地の際にひねりを入れ、「前向きに着地できるかな？」という課題に取り組ませました。すると、『ピン』で足を伸ばしている間に半回転するイメージで『フワッ』と着地すると前向きになる。その時膝に力を入れると体が前向きにな

る]、「前向きになるコツは、手をつく位置を遠くして、足を『ぶん』と回しながらやる]、「前を向くときは足を『キュッ』と前にもっていく」など、動きのイメージに加えてその児童なりのコツが表現されていくようになりました。単元終了後には、側方倒立回転を最初に学ぶ4年生のために秘伝書を作る活動に発展しました。ある児童は、自分の体感をオノマトペで表現しながら留意点も書き加えていました。

- ・ペン→最初に踏み出す足。きちんとつかないと足がうまく上がらない。
- ・タタ→手をつくとき。ちゃんと順番に手をつく。
- ・ドト→足をつくとき。最初につく足がちゃんとつかないと最後にふらついちゃう。
- ・ピン→最後に立つとき。姿勢がよくないとどんなに他が上手でも下手に見える。

他にも、「(回転するとき)足のスイングを速くする。前に向いて立つ場合、最初に着地した足の逆の足を振って、母指球に力を入れる」「腕をまっすぐにすると楽になる、最後片足ずつの方が楽になる」など、内観を他者へのアドバイスとして表現している児童がたくさんいました。

提案の最後に石田先生は、この実践を振り返り、オノマトペはあくまでも手段であり、「できるようになりたい」「友達をできるようにさせてあげたい」という思いが前提であると述べました。実践を通して、児童は動きと言葉のマッピングによって動きを覚えやすくなり、側方倒立回転がうまくできるようになっていったという感触を示しました。オノマトペは運動するときの感覚を言語化するきっかけになり、教え合う姿を誘発するものになっていました。オノマトペを作るだけでなく、教師がオノマトペと体の動きをリンクさせる問い子どもたちに投げかけることの必要性を強調し、提案を終えました。

②指定討論

続いて指定討論です。初めに佐藤哲也先生から「認識学習」に対するご自身の考えを述べていただきました。「気づき」や「認識」がゴールではなく、「認識」したものを「技能を高める」ためにどう生かすかがポイントになること、児童にとってなぜ「認識学習」が必要なのかを捉えることが大切であることを主張しました。児童の必要感に基づいて授業を創るために、ルール等がわかりやすく、技能習得が比較的容易で、思考場を広げやすい教材を使って学習を積みあげることが重要であると述べました。佐藤先生は、「できる」ために「わかる」が必要であり、知識は生かすことを通して価値が広がると考えています。また、認識の対象は全体で共有するものと個人内で完結するものに分けて捉える必要があると言います。精選したものを共有し、その上で個人がもつ課題を捉えていく必要があるとのこと。授業においては、1単位時間の中盤に「わかった」という認識が起きるように仕組み、後半にそれを「生かす」場面を設定すること、単元においても中盤に思考場面が来るように設え、児童が「考えないではいけない」状況を生むことで必要感をもって課題解決に向かうようにする、という明確な手立てが示されました。学習サイクルとして、①「動く・運動する」、②「教師や仲間とともに知識を得る」、③「気づく・

言語化する・共有する」、④「生かす」、⑤「動きが変わる」を提示し、キャッチアタックバレーボールの実践事例を用いて具体的に説明されました。

続いて司会の三本先生より、佐藤先生が「できる」ことの重要性を主張されたことに対して登壇者に意見を求めました。小畑先生は、運動有能感の視点から苦手な子、積極的になれない子に焦点を当てると、できるようになるために見通しを持ったり、これを頑張ればできるかもしれないなというものを見つけたりして、これからの自分に期待が持てる状態に引き上げることが大事だと述べました。今の自分よりもできるようになったことを認知する必要があるので、最終的にはできることが大事ですが、そのプロセスで教師のフィードバックや学習カードが必要だとのこと。久我先生は、「できる」という方向性については賛成しつつ、「できる」を強調しすぎると、得意ではない子、苦手な子、身体的アドバンテージによってできない子は従事できないということを考えていかねばならないと述べました。かつての「体力づくり」や「系統主義」の時代に、「スポーツは好きだけど体育は嫌い」という子どもが出てきたことが再現するリスクがあることを危惧し、だからこそ「認識」が体育授業研究会でもテーマになっているのではないかと捉えています。

認識的側面、つまり「わかる」を強調すると、「できる」ことを軽視しているという印象を与えてしまうことは、私も過去2回のWebinarで感じていました。小畑先生は、自身の前回の発表において「できるためにわかる」ことを示したつもりだったが、認識面や「わかる」という部分に重点を置きすぎだと捉えられてしまうのはなぜなのかを問いました。佐藤先生は、「子どもの満足が一番高いところはどこか」を大切にしていると言います。体育では、教科としての本質として「子どもはできたとき、一番満足が大きい」と捉えています。そのために初等教育段階では動ける身体を作ることが大事であり、技能下位の子については、「できる、できている」という範囲を広げ、その子その子に合ったゴール設定の必要性を唱えます。「その部分はできている」という範囲を広げ、「これができるようになったらもっといいよね」という言葉かけから意欲につなげ、「そのためにはどうしたらいいだろう」と投げかけることで必要感を生むことが認識学習だと捉えています。だとすると、「運動が得意な子も苦手な子も体を賢く動かしていくことが生涯続くことを目指す」という点では共通していると言えます。

ここで、久我先生から「できる」と「わかる」の関係性について論点が示されました。久我先生は、「どちらかが上だとか、どちらが先だとかという関係性で論じることにもそもそも違和感がある」と言います。スポーツを学ぶことを考えたとき、その構造がわかったり、グループ学習で人間関係の重要性がわかっていったりしながらできるようにもなっていくという相互作用があるのが学習だと捉えます。故に、できることだけを突きつめると、技能習熟のみをねらう運動クラブでいいということになってしまいます。また、子どもたちは既存の運動経験をもとに「やってみたい」と思うだろうし、新たなものに挑戦するときは「できる」ことの内容が変わっていき、「わかっている」ことに満足したりしている子もいるため、「わかる」方が重要なのではなく、両方大事だと捉えていると久我

先生は述べます。

この指摘は、本研究テーマを進めていく上でとても重要だと思います。今まで、「できるためにわかる」という言葉を使用してきましたが、ここにも従属関係が潜んでいる可能性があります。小畑先生は、学校教育で扱う以上、どの子に対しても成長発達を促す必要があると述べます。成長発達とは、体が動くようになること、認知的にも深まりがあること、友達との関わりを意識的に高められることという捉えです。それが授業の中で保障されるべきで、その意味でも認識学習は大事だと主張します。この議論に対し、佐藤先生は、今までの実践知から言うと、やはり初等教育の段階では体の動きが高まっていくための基礎基本をやっていくことは諦めたくないと言います。「できる」と「わかる」に上下関係があるというわけではなく、学習サイクルの中でもそれぞれが相互補完的に存在していると言います。教師の見取りは技能だけではなく、いろいろなやり方を示したり知識を身につけさせたりして、その中で起きる関わり合いを含めて見とっていきますが、子どもたちは、その中で「できること」を目指してできたときが一番嬉しいというのが佐藤先生の主張です。要は教師側のねらいと子どもにとってのゴールは別であるという論理です。

また、佐藤先生からは石田先生に、児童がそれぞれの言葉で表現するオノマトペを結果的にどう共有し、身体的高まりの効果は見られたのかが問われました。石田先生は、オノマトペ自体は違っても、それぞれがどこに気を付けているのかという点では共通するところが見えたと言います。それぞれが何に気を付けているのか話していくと、「私もそのようにやってみよう」と言って取り組んでみる児童もいたとのこと。効果や成果としては、それぞれの違いや各々が運動することに目を向けることができたという点を挙げました。技能上位の児童は、自分の身体や動きに目を向けて、どうしてできるのかとか、どうしたら友達にそれを伝えられるかを考え表現していたことです。技能下位の子にとっては、友達からアドバイスを受けて自身でも考えながら取り組んだことです。この議論に対して久我先生は、認識を学びの対象にするときに、技能の成果に対するアカウントビリティを示すのは非常に難しいと言います。それを数値等の客観的なもので表すことは困難であり、むしろ子どもたちの主観レベルでの話を積極的に取り上げ、それは何なのかを検討していくことに意味があると今の段階では考えているとのこと。その上で久我先生は、石田実践の創作オノマトペは、認識を顕在化させる手段というよりは目的となっていたのではないかと解釈しています。「情報だけだとよくわからないけど、やってみたら自分の感じが出てくる。自分の中だけだと伝わらないから、どうにかして友達に伝えたい」というように内観をどうにかして伝えたいと思って出てきた言葉がオノマトペだとしたら、それは主観に近いものです。そうだとすると、オノマトペは共感レベルでありそれを授業で共有したり目的に据えたりするのは難しいと言います。実際に、ワークシートにはそれが現れています。つくったオノマトペの下に、自身で「情報に練り上げた言葉」を書き足し、詳しく論述しているのです。内観をどうにか人に伝えるために紙ベースに表すためには、外観である「情報」に変えないと伝わらないということ子どもたち自身がわかって

いるのだろうと久我先生は捉えます。子どもたちが改めて情報に表したときに「ここは違ってないか」ということが個人内対話や相互作用で出てきたとしたら、技術の発展があるんだなと子どもたちが認識するということになります。往還しているときに、「捉えている状況がそれぞれ違ったんだね」というやり取りがあったとしたら、共感を越えてみんなが学んでいることを共有していける可能性があると言います。小畑先生も、オノマトペを子どもたちからどう引き出すかに興味があると述べています。子どもたちにとって、オノマトペで表現する目的がどこにあったかということです。特に、「うまくなりたいという過程でオノマトペを出しているのか」それとも、「できるようになっていることをオノマトペで表現しているのか」と投げかけました。小畑先生自身は、「感覚的なことと言語化の間にあるものをつないでいくもの」だと捉えているとのこと。佐藤先生も、6年生の子どもたちにとっての満足感はどこにあったかを問いました。

石田先生は、「オノマトペにしてみようと投げかけたので、目的になったと言えそうかもしれないが、友達に伝えるためというよりは、自分の身体に意識を向けさせる手立てになっていた」と述べています。伝えるために再度情報にしていくことはよいことですが、あくまでも一人一人に自分の身体に向き合うことをねらい、自分の動きをどんな感じでやっているのかを考える際にオノマトペを使うと意識しやすくなり、言葉にもしやすくなったという実感を得ています。例えば、「フンってどんな感じ？」と尋ねたら「膝に力を入れる感じ」とやりとりする場面を再度挙げながら、感じと動きをリンクさせる手立てにも言及されました。何より、子どもたちは身体と向き合いながらオノマトペを考えること自体は楽しそうだったと言います。そして、「高学年でも大人であっても、自分の身体に意識を向けることや他者の動きを共感的に見られるようになることに対して、オノマトペは有効である」と振り返りました。

③ブレイクアウトルームでのディスカッション

続いて荻原先生の進行のもと、参加者によるディスカッションが行われました。先述の通り、2回のブレイクアウトセッションを開き、活発な議論が展開しました。ここでは、2回目のセッション後に全体で共有された内容をダイジェストで報告します。

「身体的認識」 報告者：久我隆一先生

- ・「わかる、できる」の関係性を議論した。
- ・主観を大事にするときに、オノマトペはつなぐ材料、手段にはなる。
- ・オノマトペで伝わるものは、イメージやタイミング、リズムであり、動きの総体としては表せきれないだろう。
- ・スポーツが得意な者が教師になる場合、わからなくてもできてしまうことが多いが、「情報としての技術」も理解しておくことが大事だという議論があり興味深かった。
- ・内観、感覚としてわかるということが重要だということを忘れてはならない。

- ・言語に加え、補助をして体を通してわかるなど、身体的な認識を促す手立てのバリエーションを考え、構築していくことが大事だろう。
- ・体育の中で子どもどうしが共感と受容を生むために何ができるのか。吟味したい。

「認識学習の評価」 報告者：三田部勇先生（筑波大学）より

- ・「わかる」という知識の部分で評価するのか、感じたことを表出、表現する内容で評価するのか迷うという意見が多かった。
- ・知識は使えてこそ獲得したことになるのはその通りだが、そこをどう見とるのか考える必要がある。
- ・その意味では、自分の言葉で情報やポイントを学習カードに表出している場合は獲得していると捉えられるのではないか。
- ・表出・表現された言葉の質、量をそれぞれどう見とるか。評定する場合は知識の部分であろう。
- ・表出されるものは一人一人個人差がある。それぞれの内観を全て良しとするのは少し違うのではないか。
- ・今回の話題に合ったように、表出された言葉や表現に対して「これはどういう動きなの？」と教師が関連付けていくことが大事である。

「石田実践をさらに深める」 報告者：米村耕平先生（香川大学）

- ・子どもが「体幹の締め」の感覚を言葉にしようとしていたことがとてもよい。
- ・器械運動においては体の締めが大事であるが、これを子どもたちが言葉として表現しているところに大きな意味がある。
- ・教師が運動の経過にどれくらい知識を持っているのかが問われる。今回、側方倒立回転について、石田先生はどこに重きを置いていたか、順序性はどうか考えていたか。
- ・側方倒立回転の場合、勢いよく足を振り上げるところ、倒立経過をたどるところ、体を前に振り込んでいくところがポイントになる。そこを子どもたちにどう向き合わせるか、教師も考え、価値づけていく必要がある。
- ・子どもから出てくる言葉をどう授業に組み入れていくのか、今後の課題となる。

「体育科の本質論」 報告者：小島大樹先生（東京都調布市立第三小学校）

- ・参加人数が非常に多く、関心の高さがうかがえるテーマであった。
- ・技能だけではなく認識も大事。
- ・できることを目指すときに、その先に何をねらっているのが体育なのか。キーワードはやはり身体である。
- ・初等教育だからこそ動ける身体を作るという視点はわかる。
- ・中学、高等学校で優れた課題解決者になっていくことも含めていく。

「自分が考える認識学習」 報告者：長坂祐哉先生（東京学芸大学附属世田谷小学校）

- ・認識学習をする際に大事にしたい視点が3点生成された。
- ・一つ目は、見る視点、思考する視点を絞ること
- ・二つ目は、各々の感覚や捉え方は違うことを前提にすること
- ・三つ目は、技術ポイントを知る、コツを意識するだけでなく、実際それがどうすればできるようになるのかという解決の方法を認識すること
- ・この3つが組み込まれていれば、仲間とともに学ぶことが実現されるだろう。
- ・運動による発育発達の視点からも「身体、認知、情緒社会性」のバランスが大事。
- ・これらは発達段階や教材で濃淡が出るだろう。

「ポイント、コツ、カンに関すること」 報告者：小畑治先生

- ・オノマトペをうまく利用することで感覚やコツを引き出せる可能性がある。
- ・一方で、使わない方が伝わるということもあるだろう。
- ・教師はどの場面で使うのかということが大事。
- ・感覚を出す前に、ポイントをみんなで共有していることが大事。習得した上でオノマトペを使っていくとよい。
- ・個人で完結させて良いか、共通項を集約するべきかについては、今後考えていきたい。
- ・石田実践のワークシートでは、感覚を表現した後でかなり詳しく動きのことを子どもたちは記述していた。認識学習へのきっかけや深まりにオノマトペが起爆剤となることもあるだろう。

「幅広い情報交換」 報告者：黒木美穂先生（東京都調布市立第三小学校）

- ・このグループでは、身体的認識を越え幅広く現状の体育について情報交換した。
- ・コロナ禍での体育実践については、地域により様相が違った。
- ・岩手、高知は水泳を実施したが、全くやらない地域も多い。
- ・東京は、市区町村や学校で異なる。校長裁量によるところが大きい。
- ・それぞれ工夫し努力しながら安全を確保しつつ実践していることがうかがえた。

3. ふりかえり

①東京冬大会を振り返って

今回も、大きな収穫と前進がありました。現在追究している「体育科における認識学習」の中身が少しずつ見えてきていると考えています。

石田実践から学んだことは、オノマトペは子どもたちが自分自身の身体と対話しながら動きを作り出す手立てとなる可能性があることです。子どもたちが「側方倒立回転」のような動きを学んでいくときに、教師が示したり副読本やワークシートなどにあらかじめ書

かれたりしているポイントや情報からは完成形は描けたとしても、すぐには自分の身体でその動きを再生することはできません。実際に自分の身体でやってみようとしたときに、どこを意識したり何に気を付けたりしたらいいのだろうかという試行錯誤が起こります。動きを発生させるときに身体の動きの感じ、つまり「動感」が大事になります。「動感」は、個別的で感覚的で感性的ではありますが、動きのイメージが共通しているときには、共感できるのだと思います。動きの「感じ」なるものを引き出すときに、石田実践で示されたオノマトペがきっかけになるのかもしれませんが。シンポジウムで久我先生、小畑先生が解釈したように、子どもたちの学習カードを見ると、側方倒立回転の分解図に擬態語や擬音語を書き入れながら、さらにそれを説明する「片手ずつつくこと」や「足で風を切る」等の言葉が添えられていました。これは、オノマトペで表された言葉に対して「どういう感じなの?」「どこを意識したの?」と石田先生が子どもたちに問い、対話しながら引き出していった、子どもたちならではの情報であり、コツであると思います。会の最後に石田先生は、オノマトペに特化した実践を通して得た感触は、今後自分の実践における武器にしていきたいと述べました。今後も身体に意識を向けることは重要になるはずであり、実践者として単元のどこでオノマトペを使うのかについてはこれからも考え続けたいとのことです。ぜひまた私たちに実践の様子を教えていただけるとありがたいです。

②研究テーマについて

さて、令和2年度に追究してきた研究テーマについて、現時点での中間まとめをしておきます。

【明らかになってきた点】

3回の議論を経て、繰り返し議論され話題になっていた内容や重要だと思われる新視点は以下の通りです。

- ・体育科において認識学習を捉えていく際に、身体的認識が重要な視点になること。
- ・普遍的で科学的な運動技術という情報（ここでは一次情報としておく）を知った後、児童生徒はやってみることを通して動感を得て、自己内対話をし、そこから動きのイメージに近づけていくこと。
- ・自分の身体を動きのイメージに近づけていくときに、動くときのコツとして自分なりの生きた情報（ここでは二次情報としておく）に表すことができる状態になっていくこと。
- ・それぞれの動感や二次情報を共感し、共有することで学びが成立し、みんなで運動に取り組みながら、個々が「意のままに動ける身体」を目指していくことが身体を媒介にした認識学習であるということ。
- ・そのような学習を実現するための教師の手立てとして、動感を記録していくワークシートや一次情報をあえて載せないワークシートを用意すること、教師が「感じたことを動きに表すとどうなる?」「なぜできたと思う?」などと問いかけたり、発問したりしな

から動感と体の動きをリンクさせていくこと。

- ・今回の提案のように、子どもたちに自分の身体と対話させる手立てとして、オノマトペの有効性が示唆されたこと。

【ネクストプラン】

今後追究を続けていくべき課題として、以下のことが生成されたと捉えます。

- ・発達段階や学年、校種による身体的認識の内容の検討
- ・他の領域における検討
- ・シンポジウムで小畑先生が指摘した、キネステーゼを獲得していく段階での身体的認識なのか、獲得している状況における身体的認識なのかに関する検討
- ・教師の技術認識と順序性の理解

③岩田会長の話

なお、各回において体育授業研究会会長の岩田靖先生からは、いつも示唆に富むお話をいただいています。今後研究を進めていく上で重要な視点になりますので、以下に記します。

岩田会長の話

体育授業研究会会長 岩田 靖先生（信州大学）

石田先生から諏訪正樹先生の紹介があったが、「なぜオノマトペを問題にするのか」を考えた際に、運動を外側から観察してその運動のメカニズムを説明することと、その動きを自らつくり出し発生・生成させることとは、話が違うということだろう。これは、今までの提案に共通している点である。外側からの論理的科学的な情報がわかって、それをすぐさま動きにすることはできないのが人間だということだ。「では、動くためには何が必要なのか？」という際に、自分の身体の動きの感じ、いわゆる「動感」がとても重要になる。諏訪先生も書かれているが、バッティングのメカニズムを例えばバイオメカニクス的に説明されたとしても、それを学ぼうとしている選手にとっては、動きの理想型や目標像にはなるが、その目標像に近づくためにはいったいどこにどう意識を向けたいのか、ということが大事になる。体育で言えば、子どもたちはどこにどんな意識を持つと動けるようになるのか、ということだ。これが必要になるから、その動きの感覚的、感性的なところを一方で大事にしていこうということである。今回のオノマトペで表現してみようというのも、その延長線上もしくは一部分として位置づくのである。

また、今議論していることは「体育の本質論」と実は大いに関係がある。今回話題に上がったように、小学校段階は動ける身体づくりだという考え方は、大まかにはその通りだと考える。今テーマになっている身体的な認識についても、体と向き合う際にはキネステーゼがないと実は向き合えない。自分の身体の中に、動ける身体の資質としてのキネステーゼが必要である。キネステーゼはまさに身体知であり、言語化できない。体が知っている知識であり、言ってみれば「運動経験」である。それがあっても程度ないと、オノマトペにしてみようとか、比喩的言語にしてみようということは難しい。低学年、中学年くらいまでは、たくさんのキネステーゼを身につけさせることをしないと、実はこういう認識学習に発展させられない。発達段階において、いつ、どういうことを強調してやるのかという

検討が必要であり、低学年でも高学年でも高等学校でも同じようなレベルの認識学習をやる、というものではない。発達段階に応じて中心的なテーマがあるのだろう。そのテーマをどこに置くのかということをお話していく必要がある。

今までの発表は、小学校の先生中心である。中高の先生たちこそ運動、スポーツを賢く学ぶということについて興味関心を持ってほしい。さらに焦点を絞りながら議論していきたい。だんだん面白くなっている。

4. おわりに

今回の開催にあたり、事務局会場の提供及び大会実行委員長をお引き受けいただいた東京学芸大学附属竹早小学校佐藤洋平先生、登壇いただいた先生方、全体討論や各セッションの進行やまとめをしてくださった先生方、運営スタッフの方、そして何より年末のお忙しい時期に長時間参加してくださった皆様にお礼申し上げます。

どうもありがとうございました。

引用・参考文献

中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二（編著）（2012）よくわかるスポーツ心理学 ミネルヴァ書房

諏訪正樹（2016）「こつ」と「スランプ」の研究—身体知の認知科学 講談社

清水由（編著）（2013）「口伴奏」で運動のイメージ・リズムをつかむ体育授業 明治図書